令和２年度つたえる、感じる、つながる、森林×ＳＤＧｓプロジェクト事業
森林空間を活用した教育イノベーション検討委員会（第１回）

議 事 次 第

日　時：令和２年９月４日（金）10:00～12:00
会　場：Zoom

１．開　会　　10:00　～　10:05
　林野庁挨拶

２．検討委員会の設置　　10:05　～　10:30
　① 本事業の趣旨説明（資料１、参考資料１－１～１－３）
　② 運営規則の確認（資料２－１）
　③ 委員等紹介（資料２－２）
　④ 座長の選出

３．議　事
　（１）教育イノベーションについて　　10:30　～　11:30
　　① 調査方針、方法（資料３）
　　② 質疑応答、討論

　（２）モニターツアー、ワークショップについて　　11:30　～　11:50
　　① モニターツアー（資料４）
　　② ワークショップ（資料５）

４．その他　　11:50　～　11:55
　（１）今後のスケジュール（資料６）

５．閉　会

資料一覧

資料１：　令和２年度つたえる、感じる、つながる、森林×SDGｓプロジェクト事業
参考資料１－１：子どもの発達段階における重視すべき課題
参考資料１－２：令和元年度森林・林業白書概要（抜粋）
参考資料１－３：新しい学習指導要領パンフレット
資料２－１：森林空間を活用した教育イノベーション検討委員会　運営規則（案）
資料２－２：森林空間を活用した教育イノベーション検討委員会　委員名簿
資料３：森林環境教育イノベーション調査実施方針（案）
資料４：モニターツアー実施方針（案）
資料５：未来予想図ワークショップ実施方針（案）
資料６：今後の予定

１．SDGs時代に対応する森林空間を活用した教育イノベーション

本検討委員会のミッション

森林空間を活用した自然保育や学校教育、企業研修等、様々な「教育」に係る現状、ニーズ、課題といった基礎的調査を実施し、具体的政策パッケージとして整理を行い、今後の森林環境教育の推進に向けた新たな方向性の検討を実施する。

具体的には、森林空間を活用した教育分野において、現時点で主に想定される以下のア～ウの課題について、現状把握・状況分析等を行い、具体的な課題解決方策について検討を行う。

ア　幼児教育や学校教育、企業研修等の場における森林空間を活用した教育プログラムの提案及び仕組みの構築

森林空間を教育や研修のフィールドとして活用する幼稚園や保育所、学校の関係者、企業の人事・研修担当者、NPO団体等からのアンケートやヒアリング調査、研究論文等の文献調査を通じて、森林空間を教育や研修の場として活用した場合の優位性や様々な効果、課題等を整理し、幼児教育や学校教育、企業研修等の場における森林空間を活用した教育プログラムの提案やそれが活用されるための仕組みについて検討を行う。

イ　推進体制整備や人材育成

上記アのアンケートやヒアリング調査等を通じて、現状把握や優良事例の収集・分析等を行い、各地域が今後、森林空間を活用した教育に取り組むための推進体制整備や人材育成の効果的な方策等について検討を行う。

ウ　需要側と供給側での効果的な情報共有、人材派遣等のマッチング手法の検討

森林空間を活用した教育を取り入れようとしている需要側と、その要望に応えるフィールドやプログラム、人材を有する供給側が繋がるための効果的なマッチングの仕組みの整備や関係者が保有する様々な情報が効果的に共有されるための仕組みが構築されるよう、類似事例の収集を行い、効果的な情報共有の仕方、マッチング手法について検討を行う。

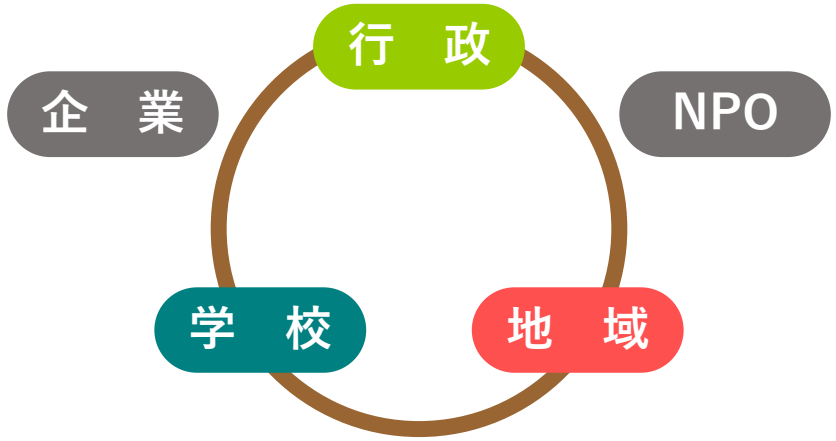
SDGs時代に対応する森林空間を活用した教育イノベーションの目指す姿（イメージ）

○ 森林空間を活用した体系的な教育プログラムがあり、行政・学校・地域が連携して、これを適切に子どもたちへ提供し続けている。その際、企業やNPOがノウハウ、人材面等で支援している。

○ この教育プログラムは、学校の内外及び子どもの各発達段階に応じた個別の取組が有機的につながっているものである。

○ 子どもたちがこの教育プログラムを受け続けることによって、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現する力の獲得が促進される。

○ 大人たちは、職場や地域等における様々な課題解決に向けて、上記の力を発揮する。その際、森林空間を活用した職場での研修や地域でのワークショップ等がこれに貢献している。



森林環境教育の現状と課題（概要）

※詳細は今後、調査等を通じて整理。

	幼児期	学童期 （小学校）	青年期 （中学校･高等学校）	成人期	備　考
学校における現状の取組	―	①身近な自然での体験学習 ②社会、理科等各教科 ③総合的な学習の時間（林間学校）	①身近な自然での体験学習 ②社会・理科等各教科 ③総合的な学習の時間課題研究	―	①体験学習→ ②調べ学習→ ③問題解決型学習の順に記載
地域における現状の取組	①出張かみしばい等 ①自然保育	①学童保育 ①サマーキャンプ	①自然観察会 ①森林ボランティア	①自然観察会・自然散策 ①森林ボランティア	

【課題】行政・学校・地域の連携がなく、学校内外及び子どもの各発達段階に応じた個別の取組が有機的につながっていないのではないか。

２．メディア・企業の協創による「森林×SDGsプログラム」の発信

①森林の新たな楽しみ方を提案する森林モニターツアーの実施

今時の価値観・ライフスタイル（ワークスタイルを含む。）に合った森林の新たな楽しみ方や過ごし方を実践するモニターツアーを企業と連携して開催する。ツアー内容については、メディア等を通じて、一般の生活者に対する発信を行う。

②「2050年の未来予想図」を作成するワークショップの実施

中学校又は高校において、生徒自らが参画して未来予想図を作成するワークショップを実施する。未来予想図は、SDGsの趣旨を参考としつつ、地域、日本、世界、地球が2050年にどのようになっているか、その中で、将来の自分たちと森や都市の関係をどうしていきたいか、地域はどうなってほしいか等を描くものとする。

３．調査報告書の作成及び報告会の開催

１.及び２.の実施内容をとりまとめ、調査報告書とその概要版を作成する。また、国民への普及・啓発、関係者の機運の醸成等を目的として、報告会はＷＥＢ配信を用いて東京都内で行う。

子どもの発達段階における重視すべき課題

発達段階	幼児期	学童期		青年期	
		小学校低学年	小学校高学年	中学校	高等学校
重視すべき課題	○愛着の形成 ○人に対する基本的信頼感の獲得 ○基本的な生活習慣の形成 ○十分な自己の発揮と他者の受容による自己肯定感の獲得 ○道徳性や社会性の芽生えとなる遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実	○「人として、行ってはならないこと」についての知識と感性の涵養や、集団や社会のルールを守る態度など、善悪の判断や規範意識の基礎の形成 ○自然や美しいものに感動する心などの育成（情操の涵養）	○抽象的な思考の次元への適応や他者の視点に対する理解 ○自己肯定感の育成 ○自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養 ○集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成 ○体験活動の実施など実社会への興味・関心を持つきっかけづくり	○人間としての生き方を踏まえ、自らの個性や適性を探求する経験を通して、自己を見つめ、自らの課題と正面から向き合い、自己の在り方を思考 ○社会の一員として他者と協力し、自立した生活を営む力の育成 ○法やきまりの意義の理解や公徳心の自覚	○人間としての在り方生き方を踏まえ、自らの個性・適性を伸ばしつつ、生き方について考え、主体的な選択と進路の決定 ○他者の善意や支えへの感謝の気持ちとそれにこたえること ○社会の一員としての自覚を持った行動

注）子どもの徳育に関する懇談会「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」（平成21年9月、文部科学省）により作成

令和元年度
森林及び林業の動向

令和２年度
森林及び林業施策

概要

特集　持続可能な開発目標（SDGs）に貢献する森林・林業・木材産業

１．持続可能な開発目標（SDGs）と森林

（１）持続可能な開発目標（SDGs）に高まる関心

- 持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）は、2015年９月の国連サミットにおいて採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」（2030アジェンダ）に含まれるもので、持続可能な世界を実現するための17 の目標・169 のターゲットから構成
- 前身のミレニアム開発目標（MDGs）とは異なり、途上国だけでなく先進国を含む全ての国が対象となっており、また、政府や国際機関だけでなく、市民社会、民間セクターなど全ての人々の参画を重要視
- 気候変動問題等が経済にも負の影響を及ぼすという危機感等により、ESG（環境、社会、ガバナンス）投資が増加するなど、SDGsへの関心の広がりを示す様々な動き

（２）森林・林業・木材産業とSDGsとの関係

- 2017年４月に国連総会で採択された「国連森林戦略計画2017-2030」では、様々な主体による協力や活動の強化等による森林分野のSDGsを含む2030アジェンダ等への貢献を提示
- 我が国の森林においては、蓄積量が年々増加し、森林を広く活用できる状況にあり、山村地域において進行する過疎化への対応や生活の質の向上を求める声の高まりの中で、様々な角度からSDGsに貢献できる可能性

【我が国の森林の循環利用とSDGsとの関係】

- SDGsの目標15に「持続可能な森林の経営」と掲げられているほか、森林そのものが様々なSDGsに貢献（目標６,11,13,14,15）
- 木材やきのこ等の森林資源の利用（生産・加工・流通のプロセスを含む）や、森林空間の利用は、その目的・内容に応じ様々なSDGsに貢献（目標２,３,４,５,７,８,９,11,12,13）
- これらの利用は、森林の整備・保全に還元されるという大きな循環につながっており、SDGsで重視されている環境・経済・社会の諸課題への統合的取組の表れといえるもの
- この循環においては、再造林や合法性が確認された木材の利用等を通じて森林が健全に維持されることが前提であり、林業・木材産業は要の役割

我が国の森林の循環利用とSDGsとの関係

注１：アイコンの下の文言は、我が国の森林の循環利用との関わりにおいて期待される主な効果等を記載したものであり、各ゴールの解説ではない。
２：このほか、ゴール１は森林に依存する人々の極度の貧困の撲滅、ゴール10は森林を利用する権利の保障、ゴール16は持続可能な森林経営を実施するためのガバナンスの枠組みの促進等に関連する。
３：これからの様々な取組により、ここに記載していない効果も含め、更にSDGsへの寄与が広がることが期待される。

2．多様化する森林との関わり

➢　我が国において、森林との多様な関わりが広がっており、森林の整備、森林資源の利用、森林空間の利用の３つに分類し、SDGsの目標に関連付けながら紹介

（１）森林の整備に関わる取組

（ア）様々な主体による森林（もり）づくり活動

➢　森林の整備は、森林保全や地球温暖化への関心の高まり等から、NPOや企業等の多様な主体が参加するようになっており、この10年でも、その数は増加

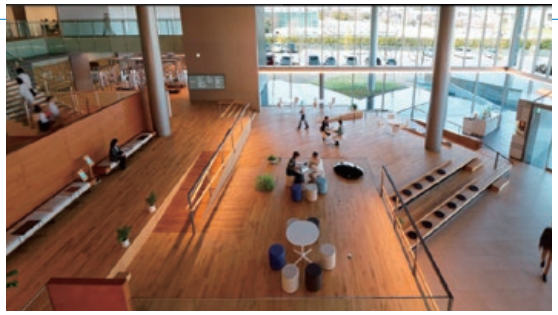
➢　森林整備の目的は、水源保全、生物多様性保全、土壌保全、海洋環境改善など様々

<事例> サントリー「天然水の森」

➢　サントリーでは、原料となる地下水を守るために、全国21か所で森林整備活動を実施

➢　専門家を交え、100年先の森林を考え、施業計画を検討

➢　森林整備により生産した木材は、関連施設の床材やテーブル等で活用



サントリー関連施設での木材利用

（イ）他分野の企業と林業との協働

➢　林業・木材産業以外の企業による、自社の得意分野を活かした林業との協働が進展

➢　測量、IT関連企業等との連携や、産官学で連携したプロジェクトの実施

（２）森林資源の利用に関わる取組

➢　森林の整備・保全や地域活性化に加え、木材利用は炭素の貯蔵や省エネ、化石燃料の代替等により気候変動対策にもつながる。持続可能な材料として森林資源利用の取組の裾野も拡大

（ア）建築物における木材利用の拡大

➢　低層住宅に加えて、低層非住宅建築物や中高層建築物においても木造化や内装木質化の動き

➢　木材の温かみから、商業施設や福祉施設等で木材を取り入れる動き。オフィスの働きやすさにも期待

➢　森林の整備・保全や地域活性化への寄与を考え、木材の利用に踏み出す例も

オフィスでの木製家具の導入

店舗の外装への木材利用

- 他材料と比較し建設時の環境負荷・コストの低減につながる点に着目した木造化・木質化の取組も
- 従来木材の利用が少ない中高層建築物において木造化・木質化を進めるための様々な技術開発の進展に期待

CLT（直交集成板）を用いた木造４階建ての集合住宅
（温室効果ガス排出の削減や工期短縮の効果）

（イ）プラスチック・金属等の代替材料

- プラスチック代替製品として、木製・紙製ストロー等の新製品が注目
- 木の主成分を原料とした新たなバイオマス素材（セルロースナノファイバーや改質リグニン）を開発
- 自動車内外装部品など、特徴を活かした製品化の取組が進展

自動車の内外装部品
（ボンネットなどの部材にセルロースナノファイバー（左）や改質リグニン（右）を利用）

環境省NCVプロジェクト
（代表:京都大学）提供

森林総合研究所、産業技術総合研究所、㈱宮城化成、㈱光岡自動車　提供

木製品用の塗料
（セルロースナノファイバーの配合により木材の変色を抑制）

（ウ）木質バイオマスエネルギー

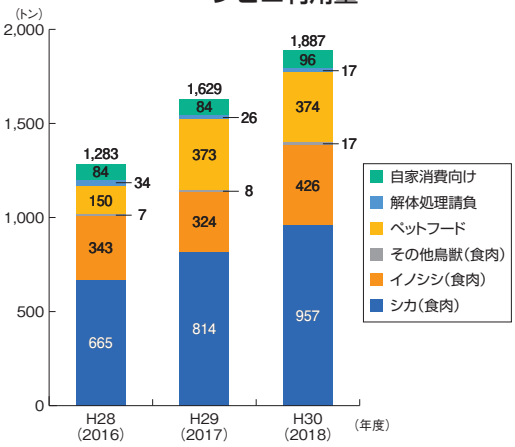
- 再生可能エネルギーの一つとして、木材チップや木質ペレット等を利用した木質バイオマスエネルギーの利用も拡大
- CO_2排出量や燃料費を削減するため、食品、化学工場等でも木質バイオマスボイラー等を導入する動き
- 集荷・加工等が必要なことから、地域の経済や働く場の創出にも貢献

小型バイオマス発電所（40kW）

（エ）きのこ・漆・ジビエ等

- きのこ、山菜、たけのこ等の山の恵みを活用する取組も、多様な主体の参画を得て拡大
- 森林整備と一体となった活用の取組や、漆の需要増に対応し企業との連携によるウルシ林づくりといった取組が進展
- ジビエ（シカやイノシシ等の野生鳥獣の肉）を利用する取組も増え、利用量が拡大
- 障がい者によるしいたけ生産など「林福連携」の取組も

ジビエ利用量



資料：農林水産省「野生鳥獣資源利用実態調査」

（３）森林空間の利用に関わる取組

- 森林空間を観光、健康、教育等を目的として利用する新たな動きが拡大
- 都市と農村の交流の進展、森林への理解を通じて、森林の整備・保全にもつながるもの

（ア）観光・レジャー

- 登山・ハイキング等で自然を楽しむ人も多いが、さらに森林内でのアスレチック、ツリーハウスの設置等により、森林内のレジャーの幅が拡大
- トレイルランニングで地域活性化を図る取組や、林業体験や森林散策等のプログラムを組み、誘致する取組も

里山を見渡せるジップスライド

（イ）健康

- 各地域で取り組む生活習慣病等の疾病予防・健康づくりに森林空間を利活用する動き
- さらに企業や医療保険者が、森林を研修や保養で使い、従業員の意欲向上、チームワーク強化や健康増進に役立てる取組も拡大

森林内をウォーキング

（ウ）教育

- 乳幼児に自然体験の機会を提供する「森のようちえん」等の自然保育を行う活動が拡大
- 小学生に対しても「総合的な学習の時間」等を利用して、環境教育を行う取組が拡大

<事例> 森のようちえん「まるたんぼう」（鳥取県）

- 「まるたんぼう」は2009年に鳥取県智頭町（ちづちょう）に母親・父親たちが立ち上げた、森のようちえん
- 町内の14か所の森林をフィールドとし、子供の自主性を尊重し、見守る保育を徹底して実施
- 移住者等の希望が多く、２園目も開園

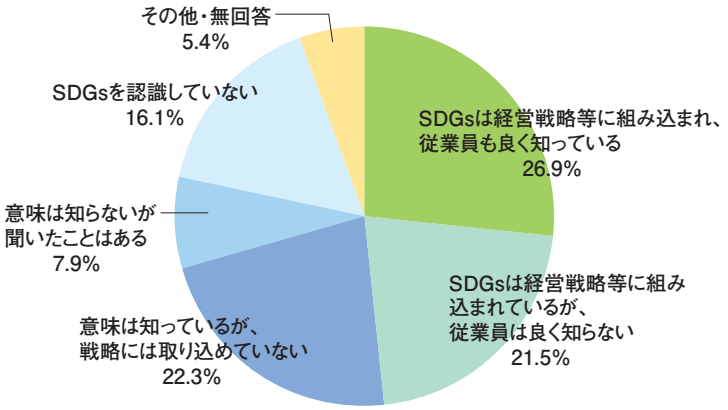
（エ）ワーケーション

- テレワークを活用し、環境の良い地方で仕事を行うワーケーションの取組が始動
- テレワークと森林整備活動を組み合わせた合宿や、サテライトオフィスの開設等の取組

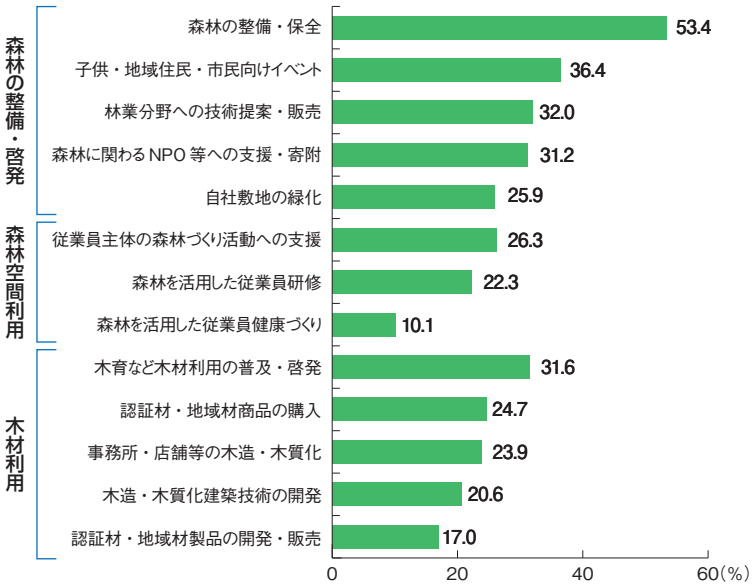
3．企業の森林に関わる意向と活動内容

- 国内企業を対象とし、SDGsと森林・木材利用に関わるアンケートを実施
- 中小企業から大企業まで、業種は製造業を中心に幅広い業種から392の回答
- SDGsを経営戦略等に組み込んでいる企業が約半数、特に従業員が1,000人を超える企業では４分の３超
- 森林・林業・木材利用に関わる活動を実施、又は予定している企業は約６割の247社
- 活動内容は「森林の整備・保全」が半数以上
- 期待する効果では、「社会貢献」が最も多い。次いで「地域との交流」
- 活動拡大に向け、企業側のメリットについての情報、連携に積極的な森林組合の紹介等に期待

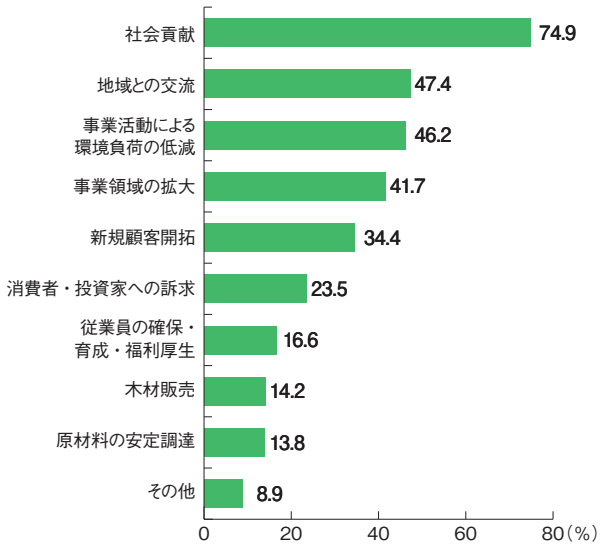
SDGsの認知度



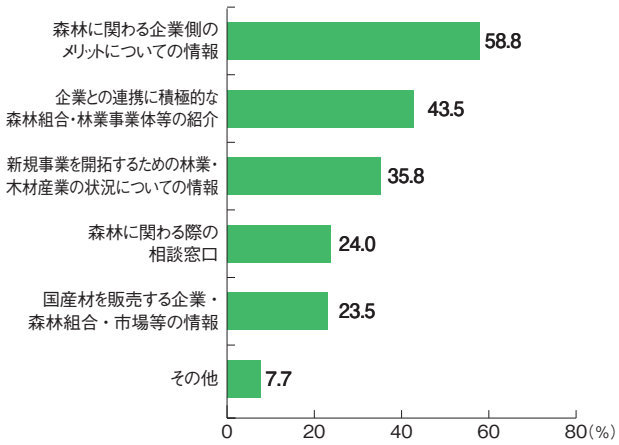
森林・林業・木材利用に関わる活動の内容



期待する効果(主な目的)



活動拡大に必要と考える条件整備



資料：林野庁アンケート調査

4．今後の課題と関係者の役割

（1）SDGsからみた林業・木材産業の役割と課題

➢　様々な主体による森林・木材の利用に係る取組の実行に当たっては林業・木材産業関係者の行動が不可欠

➢　SDGsの観点から経営を見直すことは、林業・木材産業の持続性につながるもの

（ア）持続可能な森林経営

➢　計画的に間伐等の森林整備を進めることが重要。その際には渓畔林の保全など環境面への配慮も必要

➢　伐採後に再造林されていない箇所が発生しており、その要因の一つは、現在の山元立木価格では伐採後の造林・育林コストを賄えず、森林所有者が再造林の意欲を失っていること

➢　山元への利益還元に向け、施業の低コスト化や、川中・川下とも連携した取組が重要

（イ）合法性や持続可能性に配慮した木材の調達

➢　SDGsへの関心の高まりが、木材を利用する側における持続可能性への問題意識につながり、施工業者に加え発注者からも木材の合法性を問う動き

➢　木材の合法性の担保に当たっては、「合法伐採木材等の流通及び利用の促進に関する法律」（クリーンウッド法）に基づく合法性の確認や木材関連事業者の登録の更なる活用が重要

➢　合法伐採木材や森林認証材等を求める傾向は更に強くなっていくものと考えられ、適切な供給体制の構築が求められている

（ウ）林業従事者の安全確保

➢　生産年齢人口の減少が見込まれる中、安全で働きやすく魅力ある職場づくりを進めることは、これまで以上に重要

➢　伐倒作業の反復練習や現場環境を再現する機材の活用等で、伐倒技術の向上や安全動作の確認を進めることが必要

研修：受け口の精度確認

（エ）女性参画

➢　林業の女性従事者は男性に比べて大きく減少してきたが、機械化の進展等を背景に、伐木・造材・集材従事者においては増加

➢　女性従事者の雇用が全従事者の作業環境改善の契機になる面もあり、定着率の向上も期待

女性従業員に配慮した移動用トイレ

（２）森林・林業・木材産業を支える関係者の役割

（ア）企業・個人の役割

➢　経団連が企業行動憲章にSDGsを入れ、経営理念にSDGsの考え方を取り入れる企業が増加。中小企業においては、SDGsを知り、その観点から事業のあり方を見直してみることが大切。森林が重要な地域資源である地域も多い中で、域内の企業が連携・協働し森林を活用することで、環境・経済・社会の各方面での好ましい流れにつながっていくことも期待

➢　個人の関わり方としても、SDGsに関わる一歩として「知る」ことが重要。森林に関しても、観光やレジャーで森林地域に行くことや木製品の利用など、楽しみながらできることから、森林・木材の良さを体感することが可能

（イ）大学等の教育研究機関の役割

➢　SDGsに関わる新たな動きを促進する以下のような役割を期待

・木材の利用や森林サービス産業など新たな取組の経済的、社会的メリットの分析

・森林レクリエーション等の健康面の効果の明確化

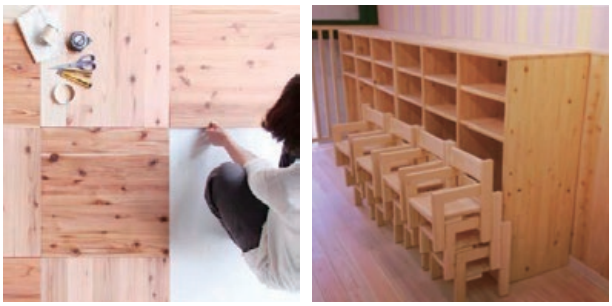
・木材を扱う設計士など、木材を扱える技術者の育成

・企業・地方公共団体等にSDGsへの意識向上やその実践を企画提案できる人材の育成

（ウ）地方公共団体の役割

➢　森林・林業・木材産業に関わる取組を促進するには、地域の体制づくりが大切な要素

➢　移住者や企業の受入れにおける地域の受け皿づくりを含め、多様な主体の結節点として、ますます役割を果たしていくことを期待



岡山県西粟倉村のベンチャー企業による木工品

（エ）政府の役割

➢　政府は2016年５月に「持続可能な開発目標（SDGs）実施指針」、2017年12月に具体的な取組の方向性を示したSDGsアクションプランを策定し、その後も更新。林業の成長産業化と森林の多面的機能の発揮のための取組を始め、森林・林業・木材産業に関わる様々な対応を記載

➢　民間や地方公共団体の取組が活性化するように、2017年12月から「SDGsアワード」を、2018年６月から「SDGs未来都市」及び「自治体SDGsモデル事業」を選定しており、この中で森林を活用する取組も選定

➢　林野庁ではSDGsアクションプラン等も踏まえ、民有林・国有林における森林整備等を促進するとともに、民間の様々な取組を支援する施策を実行。また、世界におけるSDGsの実現を図るため開発途上地域への森林分野での協力を実施

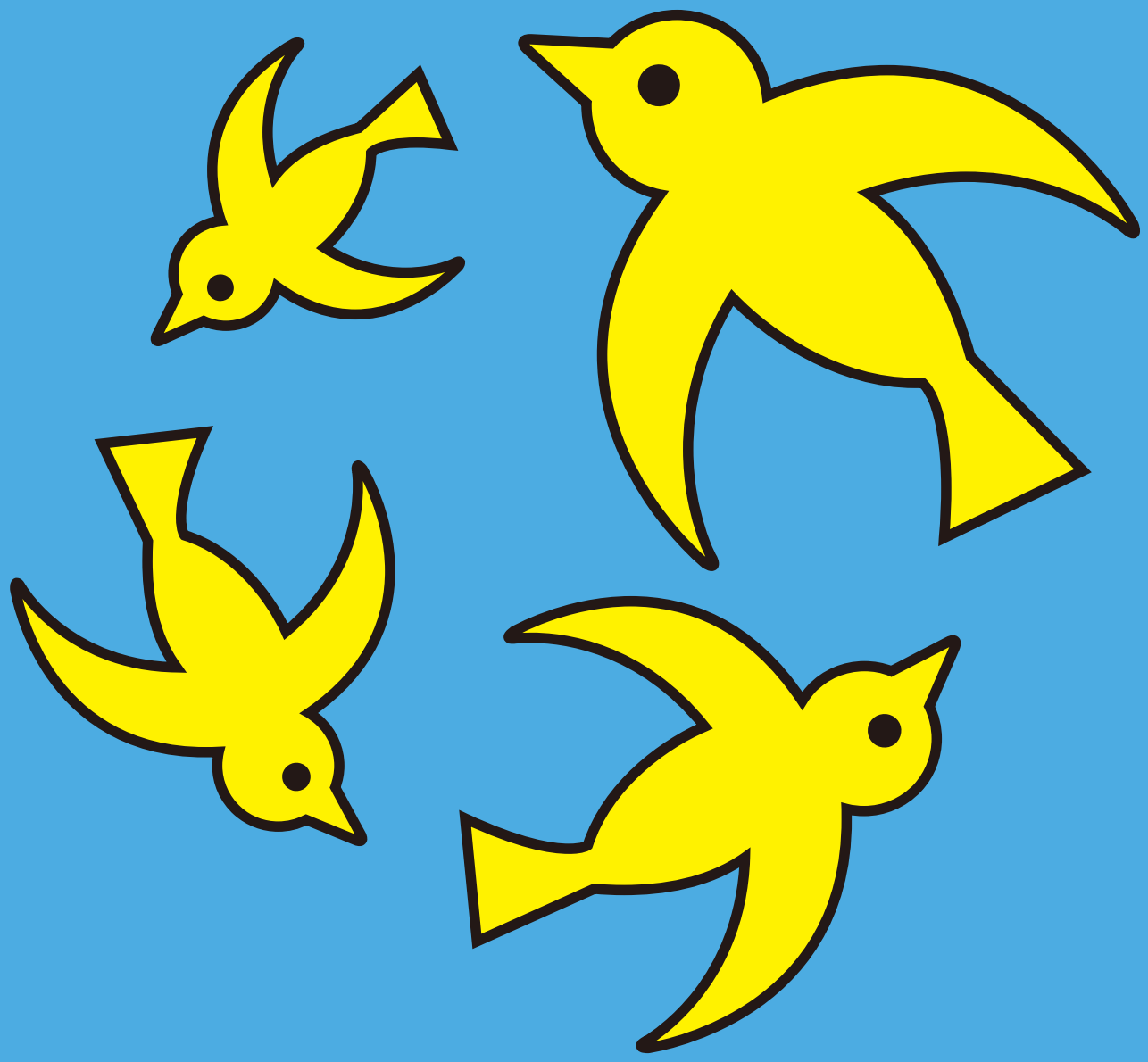
参考資料１－３

子供の未来を支える皆さまと共有したい

新しい学習指導要領

生きる力

学びの、その先へ



学校で学んだことが、明日、そして将来につながるように、
子供の学びが進化します。新しい学習指導要領、スタート。

小学校：2020年度～ 中学校：2021年度～ 高等学校：2022年度～

幼稚園は、2018年度に新しい幼稚園教育要領がスタート。特別支援学校は、小・中・高等学校学習指導要領に合わせて実施。

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

学校で学んだことが、子供たちの「生きる力」となって、
明日に、そしてその先の人生につながってほしい。

これからの社会が、どんなに変化して予測困難になっても、
自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、
それぞれに思い描く幸せを実現してほしい。

そして、明るい未来を、共に創っていきたい。

2020年度から始まる新しい「学習指導要領」には、
そうした願いが込められています。

「学習指導要領」とは、全国どこの学校でも一定の教育水準が保てるよう、
文部科学省が定めている教育課程（カリキュラム）の基準です。
およそ10年に一度、改訂しています。
子供たちの教科書や時間割は、これを基に作られています。

これまで大切にされてきた、
子供たちに「生きる力」を育む、という目標は、
これからも変わることはありません。
一方で、社会の変化を見据え、新たな学びへと進化を目指します。

生きる力 学びの、その先へ

新しい「学習指導要領」の内容を、多くの方々と共有しながら、
子供たちの学びを社会全体で応援していきたいと考えています。

目指すのは「社会に開かれた教育課程」の実現

保護者の皆さまや地域の皆さまのお力添えをいただきながら、
よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を達成していきます。

保護者の皆さまへ

子供たちの「生きる力」を育むには、
学校での学びを日常生活で活用したり、
ご家庭での経験を学校生活に生かしたりすることが、
とても大切です。

お子さんが学校で学んだことについて、
ご家庭で、ぜひ話してみてください。

保護者の皆さまの働きかけが、
子供たちの「生きる力」を育む大きな原動力になります。

DATA

保護者の働きかけがある子供の学力は高いという傾向があります。
例えば……

- □学校や友達のこと、地域や社会の出来事など家庭での会話が多い。
- □テレビ・ビデオ・DVDを見る時間などのルールを決めている。
- □テレビゲーム（携帯電話やスマートフォンを使ったゲーム等を含む）をする時間を限定している。
- □子供に本や新聞を読むようにすすめている。
- □子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている。
- □自分の考えをしっかり伝えられるようになることを重視している。
- □地域や社会に貢献するなど人の役に立つ人間になることを重視している。

（平成29年度全国学力・学習状況調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究）

「生きる力」を育むために

子供たちの学びはどう進化するの？

主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）

の視点から「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」も重視して授業を改善します。

一つ一つの知識がつながり、「わかった！」「おもしろい！」と思える授業に

見通しをもって、粘り強く取り組む力が身に付く授業に

周りの人たちと共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業に

自分の学びを振り返り、次の学びや生活に生かす力を育む授業に

カリキュラム・マネジメント

を確立して教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図ります。

学校教育の効果を常に検証して改善する

教師が連携し、複数の教科等の連携を図りながら授業をつくる

地域と連携し、よりよい学校教育を目指す

学んだことを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力、人間性など

実際の社会や生活で生きて働く
知識及び技能

未知の状況にも対応できる
思考力、判断力、表現力など

社会に出てからも学校で学んだことを生かせるよう、**三つの力をバランスよく**育みます。

新たに取り組むこと、これからも重視することは？

下記のほかに、「体験活動」「キャリア教育」「起業に関する教育」「金融教育」「防災・安全教育」「国土に関する教育」なども充実します。

プログラミング教育
コンピュータがプログラムによって動き、社会で活用されていることを体験し、学習します。

外国語教育
「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の力を総合的に育みます。

道徳教育
自分ごととして「考え、議論する」授業などを通じて道徳性を育みます。

言語能力の育成
国語を要として全ての教科等で子供たちの言葉の力を育みます。

理数教育
観察、実験などによる科学的に探究する学習活動や、データを分析し、課題を解決するための統計教育を充実します。

伝統や文化に関する教育
我が国や郷土が育んできた日本の伝統や文化を学びます。

主権者教育
社会の中で自立し、他者と連携・協働して社会に参画する力を育みます。

消費者教育
自立した消費者を育むため、契約の重要性や消費者の権利と責任などについて学習します。

子供たちが学ぶ教科等は？

太字が新設・変更部分です。

その他の教科等についても、育成を目指す資質・能力を明確にして、授業を改善します。

幼児期の教育

遊びや生活の中で生きる力の基礎を培います。

小学校

- 国語
- 社会（3～6年）
- 算数
- 理科（3～6年）
- 生活（1,2年）
- 音楽
- 図画工作
- 家庭（5,6年）
- 体育
- **外国語（5,6年）**
- **特別の教科 道徳**
- 外国語活動**（3,4年）**
- 総合的な学習の時間（3～6年）
- 特別活動

中学校

- 国語
- 社会
- 数学
- 理科
- 音楽
- 美術
- 保健体育
- 技術・家庭
- 外国語
- **特別の教科 道徳**
- 総合的な学習の時間
- 特別活動

「特別の教科 道徳」では、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて、認め、励ますための評価（記述式）を行います。 特定の考え方を押し付けたり、評価を入試で使ったりしません。

高等学校

各学科に共通する各教科等

- 国語
- 地理歴史
- 公民
- 数学
- 理科
- 保健体育
- 芸術
- 外国語
- 家庭
- 情報
- **理数**
- **総合的な探究の時間**
- 特別活動

主として専門学科において開設される各教科

- 農業
- 工業
- 商業
- 水産
- 家庭
- 看護
- 情報
- 福祉
- 理数
- 体育
- 音楽
- 美術
- 英語

特別支援学校　小学部　／　特別支援学校　中学部　／　特別支援学校　高等部

上記の教科のほか、障害による学習上または生活上の困難を改善・克服するための「自立活動」、知的障害のある子供のための各教科等もあります。

特別支援教育　幼児期から高等学校段階まで、全ての学校で障害に応じた指導を行い、一人一人の能力や可能性を最大限に伸ばします。

新しい学習指導要領で目指す学びを体感！

オリンピック・パラリンピックのメダルをつくるなら

新しい学習指導要領では、社会に出てからも学んだことを生かせるような学校教育を目指します。
各教科等を通じて得た力は、将来どのように生かされるのでしょうか？
「オリンピック・パラリンピックのメダルづくり」というテーマで例を示してみました。

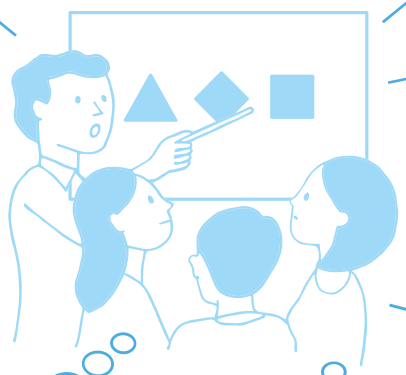
どんなメダルにする？

図画工作、美術
どんなデザインにしよう？

算数、数学
何枚必要で、予算は
どれくらいかかるだろう？

理科
どんな性質の材料を使う？

技術・家庭
どう加工すれば、いつまでも
きれいなメダルになる？
どんな材料が環境にやさしい？



社会
どうすれば開催地の特徴を出せる？

外国語、外国語活動
どんなメダルがいいか、
外国の人にも聞いてみよう！

総合的な学習の時間
過去の事例やデータを調べたり、
製作者の話を聞いたりしよう！

特別活動
みんなの意見をまとめて、
どんなメダルにするか決めよう！

音楽
表彰式でメダルを受け取る選手が
うれしい気持ちになるのは
どんな音楽だろう？

特別の教科　道徳
選手たちの努力に触れて、目標に
向かって努力する意義を考えよう!

国語　このような話合いや説明資料の作成にも、国語を要とする
全ての教科等の学び（言語活動）が生かされています。

実際のオリンピック・パラリンピックのメダルにも、各教科等を通じて得た力が生かされています。

2012年
ロンドン（英国）開催
ロンドンを流れる
テムズ川をモチーフに
した曲線を
施したメダル

1998年
長野（日本）開催
日本の伝統技術や
文化を生かした漆、
蒔絵、七宝のメダル

2016年
リオデジャネイロ（ブラジル）開催
視覚障害者に配慮し
金銀銅で異なる
音の鳴るメダル
（パラリンピック）

**学校での学びを
活用してメダルを
つくってみよう**

?

東京2020オリンピック・パラリンピックでは、
使用済み携帯電話など小型家電から抽出した
リサイクル金属で製作する予定です。

TOKYO 2020　TOKYO 2020 PARALYMPIC GAMES
日本国政府

くわしくは文部科学省「学習指導要領ウェブサイト」へ
各界で活躍中の著名人へのインタビューも！
URL　http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm?mdia=pamp01

文部科学省
初等中等教育局教育課程課
〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2　03-5253-4111（代表）

令和2年度つたえる、感じる、つながる、森林×SDGsプロジェクト事業
森林空間を活用した教育イノベーション検討委員会　運営規則（案）

１．趣　旨

令和２年度つたえる、感じる、つながる、森林×ＳＤＧｓプロジェクト事業の実施に際して、森林空間を活用した自然保育や学校教育、企業研修等様々な「教育」にかかる現状、ニーズ、課題を調査し、具体的な政策パッケージとして整理を行い、今後の森林環境教育の推進に向けた新たな方向性を検討することを目的とし、有識者による「森林空間を活用した教育イノベーション検討委員会」（以下、「検討委員会」という。）を設置する。

２．検討内容

検討委員会において検討する内容は、以下のとおりとする。

（１）　幼児教育や学校教育、企業研修等の場における森林空間を活用した教育プログラムの提案及び仕組みの構築

（２）　推進体制整備や人材育成

（３）　需要側と供給側での効果的な情報共有、人材派遣等のマッチング手法

３．委員構成

検討委員会は、学識経験者、業界関係者等の有識者の中から、別紙に掲げる委員をもって構成することとし、必要に応じて専門的な意見等を聴取するためにオブザーバーを置くことができる。

４．座長の選出

（１）検討委員会には座長を置くものとし、座長は委員の互選により選任する。なお、座長が検討委員会に出席できない場合は座長代理を出席委員の互選により選任する。

（２）座長は、検討委員会の議事を整理し、円滑に進行する。

５．検討委員会の開催

検討委員会は、令和２年８月から令和３年３月までの期間に、３回以上実施する。

６．事務局

検討委員会の事務局は、令和２年度つたえる、感じる、つながる、森林×ＳＤＧｓプロジェクト共同事業体が行い、委員への旅費・謝金の支払い、議事録の作成、検討資料の調整等、検討委員会の運営に必要な庶務を行う。

７．その他

（１）この運営規則に定めるほか、検討委員会の運営に必要な事項については、座長が定める。

（２）この運営規則は、令和２年９月４日より施行する。

森林空間を活用した教育イノベーション検討委員会
委 員 名 簿

属性	氏名	所属・役職等
委　員	天笠　　茂	千葉大学特任教授 中央教育審議会副会長
委　員	指出　一正	「ソトコト」編集長
委　員	島田　由香	ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス株式会社 取締役人事総務本部長
委　員	竹内　延彦	長野県池田町教育長 森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク副代表
委　員	南方　慎治	株式会社ルネサンス 営業企画部トラベルチーム課長
委　員	宮林　茂幸	東京農業大学地域環境科学部 地域創成科学科教授 美しい森林づくり全国推進会議 事務局長
委　員	山下　宏文	京都教育大学教授 元 森林 ESD 研究会座長
委　員	吉弘　拓生	内閣官房地域活性化伝道師 総務省地域力創造アドバイザー

資料3

令和2年度
つたえる、感じる、つながる
森林×SDGsプロジェクト

森林環境教育イノベーション調査実施方針
（案）

2020年9月

株式会社　かいはつマネジメント・コンサルティング
一般社団法人　森と未来

内容

- 本調査のポイント
- 森林環境教育の現状。
- 潜在需要。
- 全体調査方針。
- 現行森林環境教育の質と内容の検証。
- 聞き取り対象・アンケート対象。
- 結果の分析と取りまとめ。
- 検討委員の方々にお願いしたいこと。

本調査のポイント

- これから求められる森林環境教育／研修の内容と質について整理する。
- これから求められる発達段階に応じた森林環境教育の有機的なつながりとは何か整理する。
- 今森林環境教育をやろうとしている人、やっていて苦労している人を実際に支援するための方策を整理する。

森林環境教育の現状

対象者	短期、単発、訪問型体験		長期、継続、定住型体験	
	サービス内容	実施期間	サービス内容	実施期間
幼児			森のようちえん	通年。週 4～5 日の保育
小学校から高校	学校行事としての森林体験（林間学校など）	1，2 時間～半日程度。林間学校は 1～2 泊。	山村留学	転校前提で 1 年間
	学校以外の組織が企画する森林体験イベント	1，3 時間～半日程度。不定期開催が多い。		
	各種団体、企業が企画するサマーキャンプ	1～2 泊程度。最大 30 泊まで		
成人向け	森林での社員研修	1～数泊程度		
	森林での社員 CSR 活動	1～数泊程度		

学校を含む各種組織が実施

学校以外の組織が実施

潜在需要

対象者	短期、単発、訪問型体験		長期、継続、定住型体験	
	サービス内容	ターゲット顧客 （購入意思決定者）	サービス内容	ターゲット顧客 （購入意思決定者）
幼児	短期対応の森のようちえん	都市からの移住を考える子育て世代 （顧客タイプ2）	森のようちえん	地方の子育て世代 （顧客タイプ1）、 都市からの移住を考える子育て世代 （顧客タイプ2）
小学校から高校	森の学童保育／プレーパークイベント		森の学童保育／プレーパーク	
	学校行事としての森林体験	学校の森林体験活動準備担当者 （顧客タイプ3）	自然体験施設のワデュケーション拠点化	
	学校以外の組織が企画する森林体験イベント	子供に自然体験をさせたい多忙な子育て世代 （顧客タイプ4）	山村留学	ニーズが限られるため、調査の対象外とする
	各種団体、企業が企画するサマーキャンプ			
成人向け	森林での社員研修	企業経営者/研修担当者 （顧客タイプ5）	サテライトオフィス	都市からの移住を考える子育て世代 （顧客タイプ2）
	森林での社員CSR活動			

＜サービス＞

現在供給が限られているが潜在需要が見込まれる分野

＜ターゲット顧客の分類＞

学校

子育て世代

企業

全体調査方針1

- 地域レベルで思いを持った人を発掘し、寄り添い、人と人とをつなげていくプロセスを検証。
  - 思いを持った人の発掘とリソースの棚卸し
  - 人と人をつなげる人
  - それをサポートする仕組み
- 先進的な事業・試みの発掘。
  - 成功している地域について、プロセスとアクターの役割を検証。
  - まだ地域一丸とはなってはいないところでの、キーとなる「別関心層」に対する聞き取り。
  - アーリーアダプターである移住者と地元の方の間の「化学反応」の検証。

全体調査方針2

- 現行森林環境教育サービスの「内容と質」の検証。
  - 顧客・中間業者からの多面的な視点。
  - 競合／代替との比較。
  - 発達段階に応じた森林環境教育を有機的につなげるということは何かを把握。（先進的実践者に対する聞き取り）
  - 文献にもとづく森林環境教育の優位性に関するエビデンスの提示。
- 潜在需要に対応する新しい教育や研修サービスのフィージビリティを検証。
  - 先進的な取り組みを行うアクターから意見聴取。

質の検証のためのボトルネック整理

No	顧客タイプ	想定される利用サービス	サービス購入までに想定される ボトルネック
1	地方の子育て世代	「森のようちえん」「森林空間を生かした学童保育」	サービスが目に留まらない。期待するサービスがない。定員が少ない。費用が高い。
2	テレワークをベースに大都市からの移住を考える子育て世代	「森のようちえん」「森林空間を生かした学童保育」とこれらの短期お試しバージョン	サービスが目に留まらない。期待するサービスがない。短期対応がない。費用が高い。テレワークの環境がない。移住支援サービスの発信力が弱い、もしくは不十分。
3	学校の森林体験活動準備担当者	国立青少年自然教育施設などで提供される「改良版」森林体験活動	サービスが目に留まらない。プログラムがマンネリ化している。プログラムの企画実施を施設側に丸投げできないため担当教員の負担が重い。地域社会と連動した課題解決型など子どもたちに「考えさせる」プログラムがない。
4	お金を払ってでも子どもに自然体験をさせたいが多忙な子育て世代	サマーキャンプなど民間企業が提供する森林体験プログラム	民間企業主催のサマーキャンプという選択肢に気づいていない。利用したいサービスが探せない。期待するサービスがない。選択肢が不足している。費用が高い。
5	時代の変化の中で試行錯誤する企業経営者／研修担当者	森林での研修サービス	森林で研修をするという選択肢に気づいていない。「森林」をキーワードとして検索し、サービスなどを比較して、予約するマッチングサイトがない。利用したいサービスが探せない。選択肢が不足している。費用が高い。

聞き取り対象（全体で30～40人）

調査対象者	主要調査内容
1. 森のようちえん	プログラムの内容、需要の季節変動、潜在需要、保育人材の現況、受け入れ能力、短期利用者受け入れのフィージビリティー。移住者増へのインパクト。移住者と地元の方の間のダイナミズム。
2. 自然学童保育実施団体	プログラムの内容、需要の季節変動、潜在需要、人材の現況、受け入れ能力、森の学童保育を提供するモチベーションファクター、短期利用者受入のフィージビリティー、山村での実施における課題。
3. 青少年森林教育実施施設	プログラムの内容、需要の季節変動、潜在需要、人材の現況、学校向けプログラムの企画実施における丸投げ対応の可否、学校以外や民間業者に向けたプログラム開発やマーケティングの状況、コンサルティングや人材派遣の需要、地場産業などとの連携状況、学童保育等新規サービス実施のフィージビリティー、ワデュケーション拠点化のフィージビリティー。
4. サマーキャンプ実施業者（自然学校・スポーツクラブ）	プログラムの内容、需要の季節変動、潜在需要、人材の現況、集客方法、集客業者との連携状況、コンサルティングや人材派遣の需要、地場産業などとの連携状況。
5. 森林での研修実施事業者	プログラムの内容、需要の季節変動、潜在需要、人材の現況、集客方法やマーケティング実態、集客業者との連携状況。コンサルティングや人材派遣の需要、地場産業などとの連携状況。

調査対象者	主要調査内容
6. 先進的自治体	移住を促進するための現行の取り組み、 思いを持った人を発掘し、寄り添い、つなげるためのプロセス、 森のようちえんとテレワーク振興を同時に進めることのフィージビリティーと課題、移住者数の増加などの成果、 学校と地域の連携に基づく森林環境教育の実施状況、 森林環境贈与税の森林環境教育への適用状況。
7. 上記以外の地域の主要ステークホルダー	［一丸となって森林体験教育に取り組んでいる地域だけでなく、そうとも言えない地域で鍵となる「別関心層」アクターについても必要に応じて聞き取りを行う。また子供の発達段階応じた森林体験教育を有機的に連動させている先進的実践者に対しても聞き取りを行う。］ 取り組みが始まったきっかけと発展の過程、 思いを持った人を発掘し、寄り添い、つなげるためのプロセス、 人を惹きつける「場」と「場」が人を惹きつける要因。 各アクターの役割、 子供の発達段階に応じて森林体験教育を有機的につなげるための試みの本質。
8. 旅行代理店	送客の実態、潜在需要、 キャンプや研修実施業者とのプログラム共同開発やカスタマイズの状況、 サービス実施業者に対するコンサルティングの現況。
9. マッチングポータル	送客の実態、潜在需要、 キャンプ実施業者とのプログラム共同開発やカスタマイズの状況、 サービス実施業者に対するコンサルティングの現況。

調査対象者	主要調査内容
10．森林を利用して教育を行っている高等学校・中学校	サービスを認知したきっかけ。学習指導要領に照らしたサービスを利用した狙い。サービスを利用してみた感想。代替活動と比較したプログラム企画と実施に係る手間の感度。森林教育における地域との連携状況。施設側が行う丸投げ対応の重要度。サービス向上のために必要な点。価格感度。

対顧客アンケート調査

調査対象者	調査内容
森のようちえん利用保護者 n = 50	サービスを認知したきっかけ、サービスを利用してみた感想、 サービス向上のために必要な点、価格感度、移住との親和性。
サマーキャンプ利用保護者 n = 100	サービスを認知したきっかけ、サービスを利用してみた感想、 サービス向上のために必要な点、今後求められるプログラム、価格感度。
森林研修利用経営者／利用企業の担当者 n = 10	サービスを認知したきっかけ、サービスを利用してみた感想、 サービス向上のために必要な点、今後求められるプログラム、価格感度。

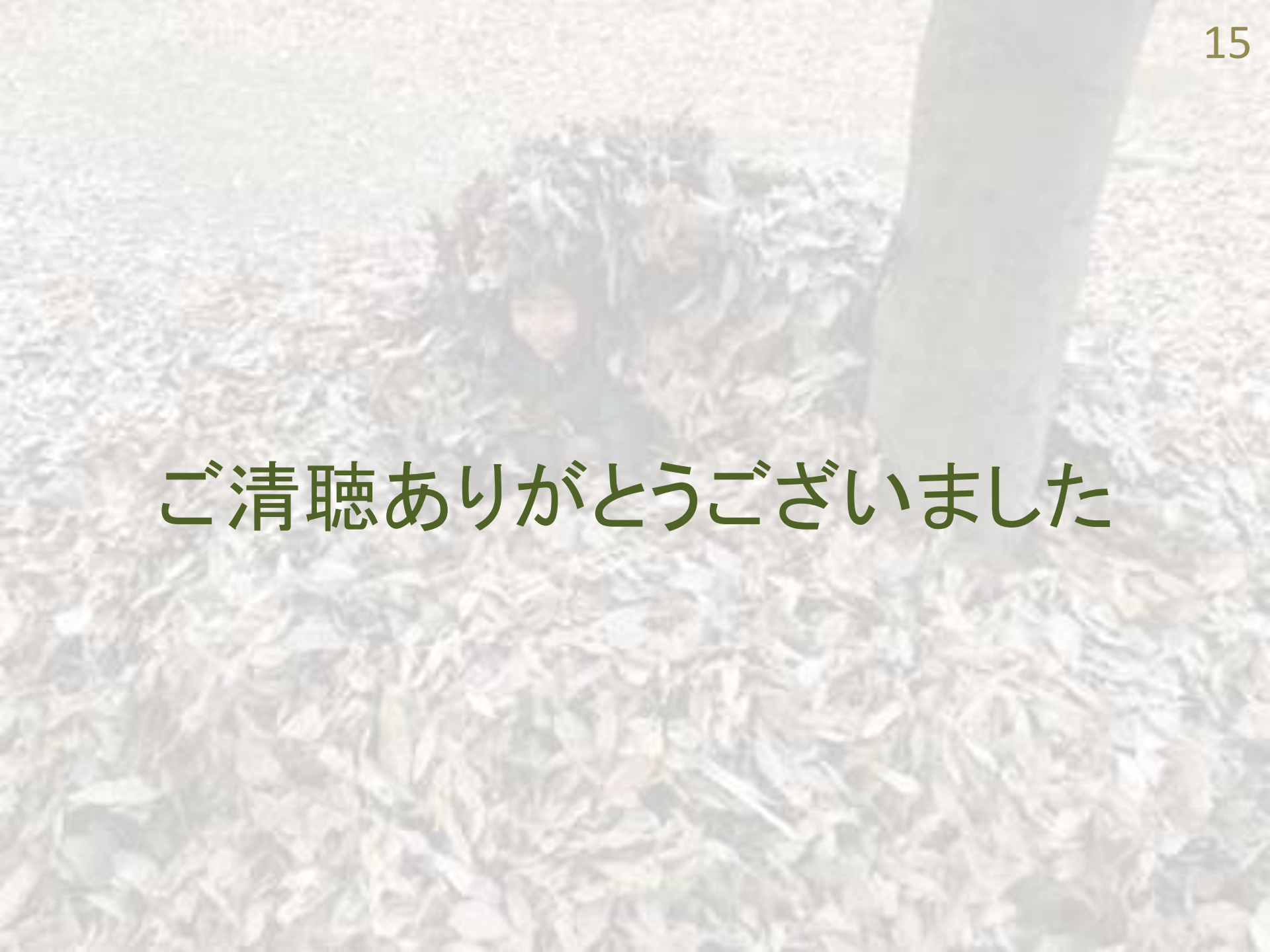
注：今後調査対象者とのやり取りの中で、実情に合わせて調査数を変更する可能性がある。

結果の分析と取りまとめ

- 需要が増大／縮小している各種森林環境教育サービスの要因分析。
  - 子どもの発達段階に応じた課題の抽出。
  - 目指す姿に向けた地域内でのつながり等のステップに応じた課題の抽出。
- 思いを持った人を発掘し、寄り添い、つなげていく、地域に焦点を当てたプロセスの分析。
- 提言：
  - これから求められる森林環境教育サービスとは－質の向上に向けて。
  - 「寄り添うためにできることリスト」。
  - 「してはいけないことリスト」。
  - 「寄り添う人」を支えるための仕組み/体制。
  - 森林環境教育を有機的につなげるためにできること。
  - 持続的な取組としていくためにすべきこと。

検討委員の皆さまにお願いしたい点

- 先進的な事例と実践者のご紹介。インタビューのお取り次ぎ。
- その他優良事例に関する既存文献のご紹介。
- 反面教師となる事例や教訓のご紹介。
- 調査票（案）に対するコメント。



ご清聴ありがとうございました

資料４

令和2年度 つたえる、感じる、つながる 森林×SDGsプロジェクト モニターツアー実施方針（案）

2020年9月

株式会社　かいはつマネジメント・コンサルティング
一般社団法人　森と未来

モニターツアー概要

【目的】

これまで森林と関わりが少なかった都市住民に対して、今時の価値観・ライフスタイルに合った森林の新たな楽しみ方や過ごし方を提案することにより、**都市住民の森林に対する理解・関心を高める。**

【業務内容】

① 今時の価値観・ライフスタイル（ワークスタイル含む）に合った**森林の新たな楽しみ方や過ごし方を実践するモニターツアーを実施**する。

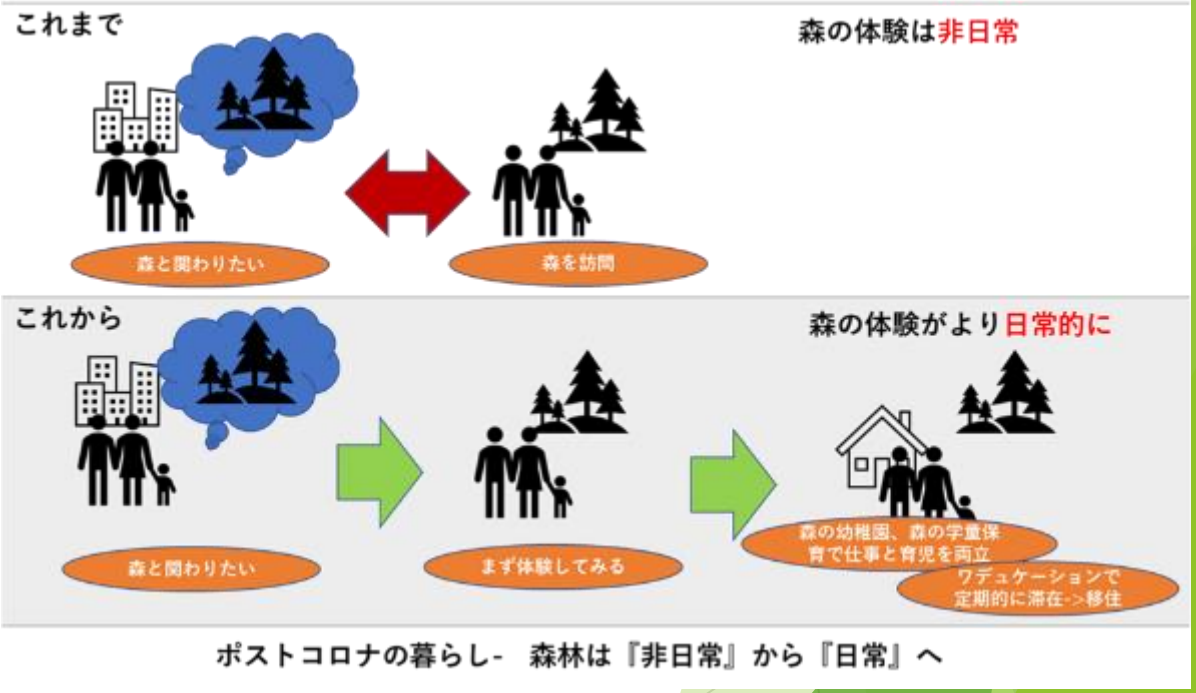
② 参加者の森林に対する理解・関心の増進等について**効果測定**を行う。

③ ツアー内容を連携する大手出版社・企業およびツアー参加者がWEBメディア、SNS等を通じて**一般の生活者に発信**する。

④ ツアーの実施結果を踏まえて、連携する大手出版社・企業と協力の上、森林の新たな楽しみ方や過ごし方の効果的な**コンテンツ形成や発信に向けた分析・発信**を行う。

モニターツアー方針

- 中心的なテーマ：**「働き方改革」**（今時の価値観・コロナを踏まえ）
- コンセプト：「**日常に取り入れられる森の時間**～森と一時的につながるだけでなく、日常生活で森とのつながりを感じる機会をつくる～」
- スタンス：モニターツアーの各プログラムを通じて、参加者と一緒に森林の**新たな楽しみ方や過ごし方を探求**する
- メディア戦略：**「当事者によるリアルな発信」**



森と未来 Future with Forest　KMC Kaihatsu Management Consulting

概要

ツアー名	森林×SDGS　ポスト・コロナ時代のNEW STANDARD探求モニターツアー
目的	モニターツアーの各プログラムの体験や参加者同士の対話を通じて、これからの働き方やライフスタイル、ビジネスのあり方に対して森林空間が提供し得る価値・可能性について探求し発信する。
実施場所	東京都奥多摩町 （公式HP：http://www.town.okutama.tokyo.jp/）
開催時期	2020年10月～11月（1泊2日）※調整中
ターゲット	**30~45歳のビジネスパーソン**
参加者	企業経営者、働き方改革先進企業の経営幹部、起業家など
人数	5名程度
連携企業・団体	㈱ノックスインタービレッジ、一般財団法人おくたま地域振興財団、㈱Jellyfish、地域おこし協力隊、大手メディア、他

参加者候補
- ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス株式会社　島田由香様
- NPO法人ミラツク　西村勇哉様　他

森と未来 Future with Forest　KMC Kaihatsu Management Consulting

プログラム（案）

1日目		2日目	
時刻	内容	時刻	内容
10:00 午後	奥多摩駅集合 オープニングセッション 森林セラピー 昼食（お弁当） Circus Outdoor TOKYOへチェックイン 「森で綴る時間」 入浴 夕食 焚き火を囲んだ対話セッション 星空浴	午前 午後 15：00	朝食 Okutama+（旧古里中学校をリノベートした複合施設）見学 昼食 地域おこし協力隊の活動拠点見学 クロージングセッション 奥多摩駅解散

情報発信

1. ウェブメディアへの掲載
2. ツアー参加者の所属先 HP、SNS、ブログ等での発信
3. 焚き火を囲んだ対話セッションの動画作成（案）

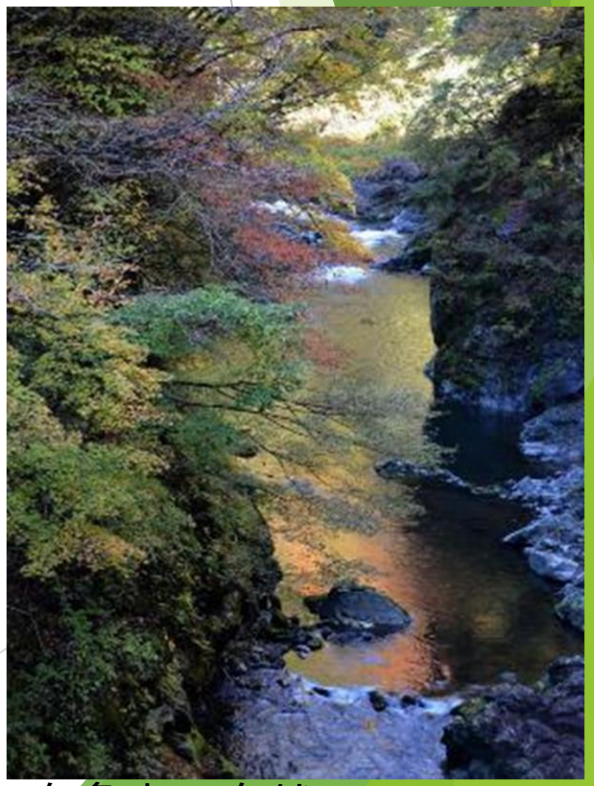
イメージ

ツアー概要説明資料

森林セラピー

Okutama＋のコワーキングスペース

Circus Outdoor Tokyoの宿泊テント



奥多摩の自然

森と未来
Future with Forest

KMC
Kaihatsu Management Consulting

概要

ツアー名	森林×SDGS　親子で楽しむ森の時間『ワデュケーション』体験モニターツアー
目的	仕事と休暇を組み合わせたワーケーションが注目される中、森林空間活用による子どもの教育を組み合わせた「ワデュケーション（Work×Education×Vacation）」を体験する親子向けツアーを実施し、参加者のリアルな声を発信する。
実施場所	山梨県北杜市 （公式HP：https://www.city.hokuto.yamanashi.jp/）
開催時期	2020年10月下旬頃（1泊2日）※調整中
ターゲット	**親子（7~9才の子どもを持つ30～45歳の多忙な子育て世代）**
参加者	親子（7~9才の子どもを持つ30～45歳の多忙な子育て世代）
人数	3組（9~10名）程度
連携企業・団体	北杜市役所、他

参加者候補
- 検討中

森と未来 Future with Forest　KMC Kaihatsu Management Consulting

プログラム（案）

1日目		2日目	
時刻	内容	時刻	内容
10:00 午後	小淵沢駅集合 オープニングセッション 参加者自己紹介 昼食 森林浴 自由時間 夕食（BBQ） キャンプファイヤー 天体観測 入浴 就寝	午前 17：00	朝食 子ども向け森林教育プログラム/テレワーク 昼食 クロージングセッション 道の駅立ち寄り 小淵沢駅解散

情報発信

1. 動画コンテンツの作成、SNS等での拡散
2. ツアー参加者の所属先 HP、SNS、ブログ等での発信

イメージ

※写真はすべて「べるが」ウェブサイトより

森の散策

木の工作

豊富な天然水

木の温もりを感じるコテージ

親子でBBQを楽しむ

森と未来 Future with Forest

KMC Kaihatsu Management Consulting

ご相談事項

「親子で楽しむ森の時間『ワデュケーション』体験モニターツアー」の参加者候補の紹介

- 親子（7~9才の子どもを持つ30～45歳の多忙な子育て世代）
- 動画コンテンツ作成に協力してくれる
- インタビュー/アンケート回答による効果的なコンテンツ形成・発信の検討に協力してくれる
- ワデュケーション体験ツアーについて、ツアーの実施後に、各自の発信コンテンツ、発信方法、発信ターゲット等や、自身の今後の仕事や生活において、森林と関わるどのようなアクションを実践していくかを発信できる

資料５

令和2年度 つたえる、感じる、つながる 森林×SDGsプロジェクト ▸未来予想図ワークショップ 実施方針（案）

2020年9月

株式会社　かいはつマネジメント・コンサルティング
一般社団法人　森と未来

「2050年の未来予想図」ワークショップ

【目的・概要】

- 未来の社会の中核を担う**中学生・高校生**に、森林と自分たちの暮らしの関わりを「自分ゴト」化し、森林に対する理解・関心を高めてもらう
- 開催地：**長野県根羽村、山梨県北杜市、静岡県掛川市、福岡県篠栗町と交渉中**
- 対象人数：1回 20-30人程度　全国5ヶ所程度で開催予定。

【ご相談事項】

① **ワークショップ開催させていただけそうな学校や団体の紹介**

- 新型コロナによる休校や、集団活動自粛の影響で、ワークショップ受け入れ先探しに難航中。
- 学校の授業時間内だけでなく、課外活動や自然活動団体、公設民営塾なども視野。
- 都会の学生にも「森のめぐみ」を考えていただくことを狙い、都市部での開催も希望。

② **ワークショップ実施成果の効果的な発信方法について、アイデアや関係先メディアの紹介**

- 中学・高校教師等に対し、総合的な学習/探求の時間のコンテンツになるというアピールを行う際に、効果的な方法・メディアを紹介願います。

森と未来 Future with Forest　KMC Kaihatsu Management Consulting

「2050年の未来予想図」ワークショッププログラム

テーマ	内容・ねらい	時間
事前学習	・森林の現状や、SDGsに関するクイズを出題。学生の考えるベースを整備。	
イントロ （レクチャー）	・クイズの答え合わせ ・森林サービス産業をはじめ、森との新たな関わり方を紹介。 ・森林のSDGsへの貢献を紹介。	30分
ワーク① 森のめぐみ （グループ内で共有）	・各自が大切にしたい「森のめぐみ」を考える。 ・「森のめぐみ」が感じられる場所を、**地図にプロット** ・なぜ大切にしたいと思ったのか、体験を踏まえながら発表。	30分
ワーク② 30年後の未来予想 （グループ内で共有）	・30年後の未来予想図 ・大切にしたい「森のめぐみ」の2050年の姿を考える。 さらに理想像を描く。**地図に付箋でプロット** ・理想の未来を創るために、自分ができること、他者に協力いただくことを発表。	30分
ワーク③ わたし×森林： めぐみへの感謝レター	・「森のめぐみ」宛の手紙をしたためる。思い出、自分のできることなど	30分
休憩		30分
発表	・各班の代表者が、手紙を読み上げる。 ・招待した自治体関係者、林業関係者等に聞いてもらい、意見交換。講評。 ・他の開催地域の参加者へ向けたメッセージ動画を撮影。	60分
		210分

※　森林体験活動と組み合わせて実施するケースもある。

学生の言葉によるリアルな発信
～フォレスト・バトン・パス～

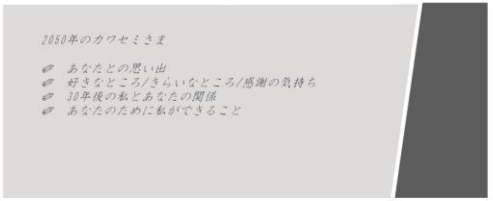
森と未来 Future with Forest

KMC Kaihatsu Management Consulting

成果物・発信

ワークショップの内容や成果物は、学生のアイデア、受け入れ地域のニーズに照らし、開催地ごとに異なる可能性もある。

フォレスト・バトン・パス　成果物	発信
他の地域の学生に向けたビデオメッセージ	You Tubeで発信（参加校でのリレー形式）
「森のめぐみ」の写真+手紙を載せたデジタルブック（検討中）	Issuuなどのオンラインカタログサービスで公開リンク共有することで、誰でも閲覧可。
写真のコラージュ（モザイク画）	（検討中）
実施レポート	開催地域のローカルメディアの取材依頼 地域の観光協会、森林組合など地元関係者のメディアによる発信 森づくりフォーラムメーリングリストでの発信



デジタルブックイメージ

事業成果物	内容
ワークショップ実施マニュアル	森林環境学習の一環として、総合的な学習の時間等に教員などが実施するためのノウハウを掲載。

森と未来 Future with Forest　KMC Kaihatsu Management Consulting

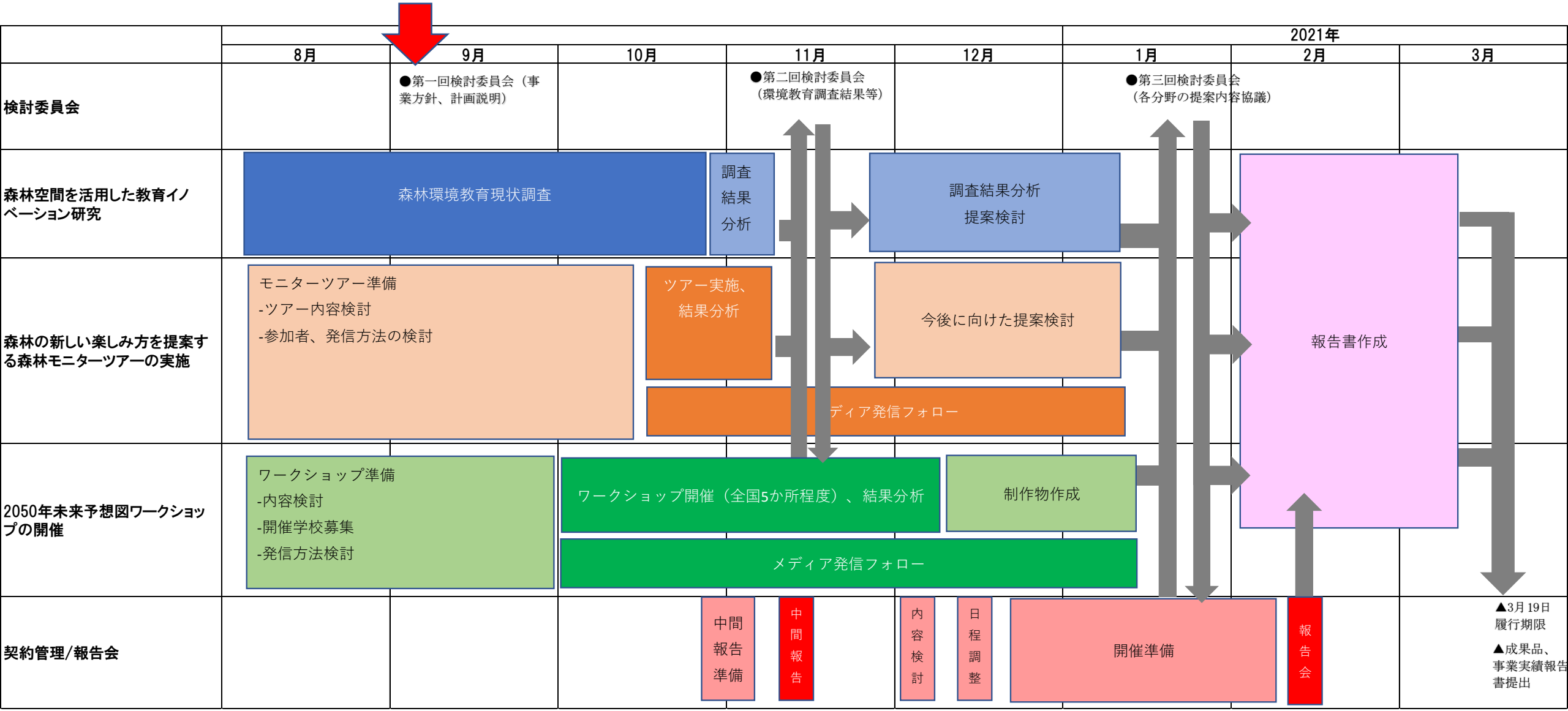
ワークショップ実施マニュアル構成案

	コンテンツ	内容のポイント
1．ワークショップ概要	未来予想図作成ワークショップとは	未来予想図作成ワークショップの趣旨
	フォレスト・バトン・パスとは	フォレスト・バトン・パスの趣旨、仕組みの説明
	基本プログラム構成	プログラム構成の趣旨、ねらいなど。事前学習含む。
	評価方針	総合的な学習/探求の時間内で行う場合の評価方針
	実施者	学校主導／学生主導
	対象者	中・高校生
	場所	学校の教室／フィールドワークを含む場合
	協力機関	自治体、国立自然教育施設、公設民営塾、地域おこし協力隊、大学、森林組合、NPOなど、協働形態ごとの工夫
2．実施要領	準備	必要物品、広報、協力機関や父兄との調整
	当日の進行	タイムスケジュール、ファシリテーションのこつ、SDGsとの結び付け方
	成果発信：フォレスト・バトンのまわし方	動画作成とYouTubeへの投稿方法
	実施後フォロー	継続的な活動支援方法、オンラインリテラシー
	実施にあたっての留意点	学生の自主的な活動を促す工夫、対外発信心得など
3．事例紹介	事例紹介	モデル地域5ヶ所で実施したワークショップの事例

森と未来 Future with Forest　KMC Kaihatsu Management Consulting

資料６

今後の予定


2021年
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
検討委員会
●第一回検討委員会（事業方針、計画説明）
●第二回検討委員会（環境教育調査結果等）
●第三回検討委員会（各分野の提案内容協議）
森林空間を活用した教育イノベーション研究
森林環境教育現状調査
調査結果分析
調査結果分析
提案検討
森林の新しい楽しみ方を提案する森林モニターツアーの実施
モニターツアー準備
-ツアー内容検討
-参加者、発信方法の検討
ツアー実施、結果分析
今後に向けた提案検討
ディア発信フォロー
報告書作成
2050年未来予想図ワークショップの開催
ワークショップ準備
-内容検討
-開催学校募集
-発信方法検討
ワークショップ開催（全国5か所程度）、結果分析
制作物作成
メディア発信フォロー
契約管理/報告会
中間報告準備
中間報告
内容検討
日程調整
開催準備
報告会
▲3月19日
履行期限
▲成果品、事業実績報告書提出